

## 121. 被殻出血103例の検討

—手術例と非手術例の比較—

佐藤 和彦・斎藤伸二郎 (鶴岡市立荘内病院)  
八木 直幸・泉谷 浩 (脳神経外科)

過去6年間に当科を受診した被殻出血103例について、重症度、CT分類別に見た、開頭血腫除去術による手術例41例と非手術例62例の生命予後と3ヵ月後ADLの比較検討を行った。

## 〈結果〉

1. 生命予後は重症度46以上では手術例、非手術例ともに悪かった。
2. CT分類Ⅳaでは手術例の生命予後が、非手術例より優れており絶対的手術適応と考えられた。
3. 3ヵ月後ADLは手術例と非手術例で有意の差はないが、重症度2と3で非手術例ではgoodがないのに対して、手術例ではgoodとなる例がある点は注目し値すると思われた。

## 122. 視床出血における生命予後と機能予後

—特に初診時神経学並びにCT所見との相関—

小穴 勝磨・立木 光 (八戸赤十字病院)  
脳神経外科  
土肥 守・金谷 春之 (岩手医科大学)  
脳神経外科

最近、視床出血は増加傾向を示している。そこで演者らは、過去約5年余に八戸赤十字病院脳神経外科に入院した視床出血のうち、非手術例38例を中心に、初診時意識レベルとCT所見を検討し、視床出血の生命予後並びに機能予後を研究した。

## 〈生命予後不良群—死亡群〉

- ① 死亡例は8例、死亡率は21.1%。
- ② 死亡例は意識は30より悪い。
- ③ 血腫長径は32.4mm以上。
- ④ 血腫部位はMedial type。

## 〈機能予後良好群—ADL1+ADL2〉

- ① 血腫長径が23mm以下の血腫例。
- ② 24mm以上の血腫ではPosterior type。
- ③ 意識0~2迄のPosterior type。

## 〈社会復帰群—ADL1〉

- ① 血腫長径32.4mm以下。
- ② 意識レベルは3迄(0~3)。
- ③ 対光反射存在例。
- ④ 運動障害では不全片麻痺より軽い症例等の4条件を完備していた。

## 第219回新潟外科集談会

日時 昭和59年12月2日(日)午前9時

会場 医学部第三講堂

## 1. 内胆汁瘻を伴った良性胆道狭窄の2例

伊賀 芳朗・松木 久 (日本歯科大学附)  
宮下 薫・三科 武 (属医科病院外科)  
大西 義久 (新潟大学病理)

内胆汁瘻を伴い、胆道癌との鑑別が困難であった良性胆道狭窄の2例を経験したので報告する。

症例1は、昭和55年胆石症及び壊疽性胆のう炎にて胆摘とT字管挿入を施行したが、約1年後黄疸が出現し受診した。精査にて胆管狭窄があり、昭和56年11月手術が施行された。手術所見では、T字管挿入部に胆管壁の肥厚があり、胆管十二指腸瘻を形成しこれによる狭窄であった。胆管切除と胆道再建術が施行されたが肥厚した胆管は組織学的に、神経鞘腫であった。術後3年を経た現在経過良好である。

症例2は、昭和56年2月頃より発熱と黄疸の消長を繰返し、59年7月受診した。精査にて胆管狭窄があり、同年9月手術が施行された。手術所見では、慢性胆のう炎とそれによる膿瘍形成及び胆のう十二指腸瘻があり、炎症性癒着による狭窄であった。瘻孔を切除し経肝的にステントチューブを挿入した。1ヶ月を経過した現在、経過良好である。

## 2. 胆石症と、肥満及び結石成分に関する検討

植木 秀功・広田 正樹 (白根健生病院)  
福田 稔 (外科)

当科における胆石症49例を対象とし、標準体重より算出した肥満度との関係について考察し、健常人、胃十二指腸潰瘍患者を比較対象として検討を加えた。血清総タンパク値、血清総コレステロール値についても検討した。

また、結石成分を赤外線分光計により分析し、その結果を報告する。

## 3. 先天性胆管拡張症の2手術症例について

吉谷 克雄・植木 光衛 (刈羽郡総合病院)  
関矢 忠愛・斎藤 六温 (外科)

先天性胆管拡張症は、胆管壁からの高い発癌率の報告とともに、膵管胆道合流異常を高率に伴うことが知られ